姫プレイ最強

ゆちー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姫プレイ最強

【Ｎコード】
Ｎ７３８８Ｋ

【作者名】
ゆちー

【あらすじ】
ヴァーチャルＲＰＧに入った主人公が意識せず姫プレイを行うことで苦労せずにいつのまにか最強になっていくまでを描いたお話です。

プロローグ

女性なのにゲームが大好きなのって少人数なんだよね。
友達にはゲーム好きなんていえないから隠しているんだけど、私、武本美香１８歳！ついに念願のＶＲＲＰＧソフトを手に入れましたよ！
と、朝からルンルン気分で待っていた小包をビリビリ破る。
お母さんにはいつもキレイに包装紙ははがしなさいって言われるんだけど、そんなことにかまっていられない。どうせ一人暮らしで誰にもバレやしないんだし。

え、ＶＲＲＰＧってなにかって？
なんと自分がゲームの世界に入ったように感じることができるゲームなんだな。
他の人とも一緒にゲームできるＭＭＯと言われるものだから、普通のゲームと違ってクリアして終わりと言うことではないみたい。

さて、ゲーム開始してみよ～。
ブオンという音とともにＶＲＲＰＧファンタジアの世界がはじまったのでした。

1（前書き）

やっとこさゲームの中です。

1

目の前が真っ暗になったと思ったら目の前に小さい光の玉がふよふよ漂ってきた。

「ファンタジアの世界へようこそ！」

光の玉はチカッと輝いたかと思うと小さい妖精になった。
あら、けっこう可愛いな。

「どうもー。はじめましてー」

挨拶は大事よね・・・。

「はじめまして！真っ暗な世界でびっくりよね。私は案内役の妖精ルーナです。よろしくね」

あら意外とちゃんと受け答えできるのね。

「よろしくー」

妖精さんはにこっと笑ってくるっとその場で回転した。
可愛いな。ホント。ペットにならないものか・・・。

「さて、まずここではあなたのキャラ作成を行います。お名前はなんにしますか～？」

名前かー。こういうオンラインゲームだと本名はちょっとまずいよね。

「じゃあ、るしふぇ、でお願いします」

「おっけー。ちょっとまってねー。るしふぇは、うん、使えます。」

よかった。前のゲームで使ってた名前が使えて。

他に思いつかないし。

「じゃあ次に種族を選んでね。人間、エルフ、ハーフエルフ、ダークエルフの4種類が現在選べる種族になってます。種族の特徴も言いましょうか？」

「いえ、エルフで！」

特徴なんてよくわからないけど一番かわいいっぽいのはきっとエルフに違いない！

てことでエルフにしてみた。

「最後にキャラの外見を作りますね。ランダムで5回まで作成できるのでいいなと思ったところでストップしてくださいね。ちなみに髪の色と目の色は指定できますが指定されますか？」

「んー、じゃあ髪はピンクで目は薄い青でお願いします」

やっぱピンクよね。可愛いし。

「じゃ～いっくよ～。とー！」

光が固まって弾けたと思うと人が目の前に立ってました。
ピンクの髪に薄い青い目・・・・だけど・・・・すごいデブ・・・・。
ないでしょ。これホントにエルフなわけ・・・。

「無理！次！」

「そ、そうですよね。こんなにひどい外見なのはじめて見ました」
おいおい・・・・。

「気を取り直して次、と～」

同じように光ったかと思うとまたしても酷いのが・・・。
すらりとした体なのはいいけど、すんごいブサ顔だよ！これならリアルの顔持ってたほうがまし！

「ねえ、これひどいのばっかなんだけど・・・。嫌がらせなわけ？あと3回しかないんでしょ？」

半ばキレつつ妖精を睨むと、ビクッとされてしまった。
くぅ、そんなに怖い顔してましたか・・・。

「つ、次は最高に力を入れて作らせていただきますので、ごめんなさい＞＜。」

「次失敗したら羽むしるわよ」

プルプル震えてるわ。失礼な。

「で、では、ん～～～～～～～」

長いな・・・すでに5分は集中してるんだけど。脅しすぎたかな。

「とりゃあああああああ」

今までに無い激しい光がでて目がくらんでしまった。

か、確認できないじゃん・・・。

「成功しました～～～～！これなら絶対文句なしですよ！おっけーおっけー。てことでファンタジアの世界へいってらっしゃ～い！」

「お、おい！私はまだおっけーって言ってないわよ。姿も見てないわよ～～！」

叫び声もむなしく、急に地面がなくなったかと思うと体が落下をはじめたのでした。

お～ち～～～る～～～～～～～～！

2（前書き）

妖精さんはいたずら好きっと・・・。

2

真っ暗闇の中フリーフォールに乗ったみたいに体が落下していく。

あああああ。あの妖精めええええ。

今度あったら覚えていなさいよ～～～！

悔しい思いをかかえつつも、ちょっと焦ってくる。

ねえこれっていつまで落ちるんだろう。

落ちる速度が一定なのはありがたいとして・・・。

と思ったら下にファンタジアのでっかい文字が見えてきた。

まるで映画のはじまりのように、私が下に落ちるものだからどんどん文字が大きくなってくる。

目の前いっぱいに文字が広がったときに落下が止まったと思ったら、文字が輝いた。

オープニングなのかな。にしても派手ですね。

なんて思っていたらまたしても暗闇になり、瞬きしている間に地面に足が着いた間隔があった。

波の音が聞こえるんだけど、いままで暗闇にいたせいで目が開けられない。

というか風の感覚まであるよ。これが現実じゃないなんて信じられない。

そろそろと目をあけると、そこに広がる世界をみてさらに圧倒される。

波打ち際に広がる砂浜。ところどころにはえる椰子の木。
そっと砂を手に取ったら零れ落ちる感覚まで同じ。
なんて、なんてファンタジーなんだろう。
「うそみたい」
思わず呟いた言葉に
「うそじゃないですよー」
と返事が。
ん・・・・？
後ろを振り向いてみると
「この腐れ妖精がーーー！！！」
さっきまで一緒にいた妖精ルーナがふよふよ浮かんでいたのでした。

3（前書き）

妖精さんの運命やいかに?･!

3

振り向いた先にいたのはさっきの妖精。
そうよ、最初は可愛いなんて思っていたけど、うふふ、ここであったが１００年目。

ガシッと妖精を掴むと、ええ、掴めたのよ。自分でもびっくりだわ、羽に手をかけた。

「妖精の羽っていくらくらいで売れるかしら・・？」

自分でも目が据わっているのがわかる。
妖精の羽ってどうかんがえてもレアアイテムよね。最初っからこんな収入が入ってらっきーらっきー。

「ま、まってくださーーい！」

涙をダーダー流しながら妖精さんが哀願する。

「いったいどんなブサ顔にされたのかしら、私。羽くらいむしって装備で綺麗を演出しないとねー」

体を見下ろすにまとも、むしろナイスプロポーションなわけだけど、顔がどうせまたブサに違いないと思うと体から黒いものがにじみ出てるのがわかる。

「き、きれいです！るしふぇさんは非常に綺麗ですよ！！本当なんです。お願いだから羽に力をいれないでくださーい！！」

「あ、こ、これを見てください！！！」

力を入れ始めたところでポンと妖精が鏡をだした。

ん・・・・。

あら・・・・。

ホントに綺麗。

てっきり証拠隠滅のために飛ばしたのかと思いきや、あら、やればできるじゃない。

というかむしろ・・・。

「すっごい美人ね！私ナルシストになっちゃいそ～」

黄金比というのだろうか。薄く青い目は輝くばかりだし、薄めのピンクの髪がかかる肌は白くてしかももち肌だわ。

お～～～、こんな美人さんテレビの中でも見たことが無い。

唯一とんがった耳が不思議な感じだけど、これはこれでまたいい感じ。

るんるん気分が浮上してきた私は、獲物である妖精を離してあげることにした。

キャッチアンドリリース。自然に優しいよね。

「さーおいき。もう狩人に捕まるんじゃありませんよー」
妖精はずさっと私から離れたかと思うと、
「私は獲物じゃありませーーん！」
プンプンと怒り出した。

「まったく案内人の妖精を捕まえて、さらに羽をむしるだなんて。こんな怖い人に会ったことが無い！あぁ、でも役目は役目だし。こんな人とＬＶ２０になるまで一緒に旅をしないといけないなんて。神様酷いですーーー」

「誰にもつかまったこと無いの？」

「ないです！！」

「とういか捕まえれるはずがないし・・・。なんで捕まえれるんだろう？着合いを入れて作りすぎたのかなぁ・・・」

ブツブツ言っている妖精に、
「まーまー、考えすぎると禿げるよ」
と優しい一言。

「な。。」

固まっちゃったけど、どうしたのかしら。

4（前書き）

なかなか戦闘シーンまでいけないです^^;

4

さて、固まっている妖精はほっといて、周りを見渡してみる。
水平線が見える海は、ハワイなんかの写真で見る感じのマリンブルー。
そよそよそよぐ風が気持ちいい。

思わず裸足の足を広げて、
「うみだーーー！」
叫んでみた。

なんて開放感なんでしょう。
軽く旅行気分だわ。おしいのはここに水着もなければ、トロピカルな飲み物もないことだけど。
周りに変な丸い生き物がピョンピョン跳ねててそれが違和感ありだけども。

「ちょ、ちょっと、無視しないでよね！」

やっと復活したっぽい妖精が語りかけてくる。

「なによもう、なんか用なの？」

「用なのじゃないでしょー！まったく段取りが狂うんだから・・・。いいこと！私は初心者のころいろいろと手助けをするありがた～～い妖精さんなのよ！本当はあげたくないけど最初の武器をあげるからとっととその辺のマリブーを5匹倒してきてよね」

ポンと目の前に短剣がでた。

「なにこの安っぽい短剣。もっといいもの出しなさいよ」

といいつつ手に持ってみる。

「初心者が生意気言ってるんじゃないわよ！とっとと行って来なさいよね」

まあ最初からすごい武器がもらえるわけも無いか・・。

「ねーねー。私魔法使いたいんだけど、使えないの？」

一応聞いてみる。

「エルフは敏捷性と魔法の扱いに長けてるけど、魔法を使うには魔法用の武器が必要なのよ。今は短剣で短剣スキルでもあげときなさい。あ、ちなみにこの世界に職業って概念はないからね。スキルをどんどんあげていくとそれなりに強くなるわよ～」

「スキルって上限あり？」

「全く無いわよ。でもだんだんあげにくくなっていくけどね」

「技はだせないの？」

「技をだすには、1、スキルを一定以上あげる、2、特定の魔法書もしくは技能書を使う、3、ある行動をするの3つね。他に隠れコマンドあるかもしれないけど把握してないわ」

「めんどくさ～」

「とりあえず、その短剣だけで下着姿のアンタにはまだまだ先の話よ。とっとと行って来なさい」

へいへいっと、ピョンピョン跳ねてる動物の側に行ってみる。
意識してみると上にマリブーって書いてある。
すっごくフワフワで可愛い動物だけど、私のために死んでね。
ということで短剣を突き刺してみる。

突き刺したところから光の粒子がでてくる。
よかった流血とかいう表現がなくって。

2回くらい短剣で切ったら体当たりをしてきた。
む、でも痛くないなー。

HPバーはほとんど減っていない。
意識するだけで敵の名前、HP、自分のHP、MPなんかは見ることができる。

体当たりをされつつも5回ほど切りつけたところでマリブーは消滅した。

どんどんいっちゃいますか。
と一心不乱にマリブーを狩りだす。

3匹ほど倒したところでピコンと音が鳴った。
マリブーの靴を手に入れましたとの声も聞こえる。

「おーい、腐れ妖精やーい！なんか手に入れたっぽいけどこれなあに？」

「だ、誰が腐れ妖精よ！ちゃんと私にはルーナって名前があるんだからね！」

「へうへい、で、これなによ？」

「アイテムをゲットしたのね。初心者用の靴だわ」

「ほーほー」

「確認方法は、バッグオープンて言ってみて」

「バッグオープン！」

目の前に透明な枠が出てきた。たくさんの枠の中にはひとつだけカードが入っている。

「そのカードに触れながら、装備、というと装備できるわよ」

言われたとおりにやってみる。

「装備！」

ひゅんと音がしたかと思うと、かわいい靴を履いてる状態になった。

「おー、かっわい～。どらどら、おぉ防御＋1なのね。でもモコモコしたのがついてて可愛いブーツかも」

「初心者用だから、そのうち買い替えないとね」

「やる気あっぷー」

とういことで次の獲物に飛びかかるのでした。

5

どんどんマリモのような白い跳ねる生き物を倒していく。
5匹倒して妖精ルーナのもとにもどると
「よくやったわね。これで初歩の戦闘はわかったと思うわ。てことでこれをどうぞ」

ポンとでたのが上下一体型の服。
パサッと私の上に落ちてきたんだけど、これはどうやって着ればいいのかしら。

「アルケマイズ　て言うとカードになるわよ。あとはさっき言ったとおりね」

「アルケマイズ！」

目の前から消えた。

「バッグ　オープン！」

バッグの中に初心者の服というカードが入っているのを確認して

「装備！」

おー着れた。

なんかダサい麻の服だけど、さっきカードの状態でみたところ防御力が＋2だからそれなりに役に立つって感じかしら。

「この世界にあるものはアルケマイズできるものとできないものがあるのね。戦闘で得たアイテムはほとんどカード化されて最初からバッグに入っているけど、もともと目の前にあるものはアルケマイズって言ってみてカード化されるか見てみるのもいいと思うわ」

「アルケマイズ！」

試しに砂をアルケマイズしたところ、ちゃんとバッグに入った。えーと、ただの砂ですか・・・。あんまり役にたたなさそうね。

「次は近くにある町にいって町長さんのお話を聞いてみてね」

うし。行ってみよう～。

でもその前に、このマリブーの装備って可愛いよね。

他のもでないかやってみようっと。

ということでマリブーを片っ端からどんどん倒す。

もう3匹倒したところで

ちゃらららっちゃら～

どっかで聞いたおなじみの音楽だね。全身が光に包まれた。

「LVあっぷおめでと～。HPとMPの最大値があっぷするわよ。他はステータスが種族の特徴におおじてランダムにアップするからねー」

「え、運任せなの？」

「ま、そうなるけど、全く０ってことはないし、ステータスが全てってこともないから。だいたいエルフだとＤＥＸとＷＩＳが多めにあがるわね」

「ふーん」

「ちなみにシステムブック　オープンていうとでてくるシステムが入った機械ステータス画面を選ぶと確認できるわよ」

「システムブック　オープン！」

おースマートフォンみたいなのが出てきた。

ポンポン操作していくとステータス画面がでてきた。

なになに

キャラ名　るしふぇ

装備

胴　初心者の服　　防御＋２

足　マリブーの靴　　防御＋１

ステータス

ＣＯＮ　３

ＳＴＲ　３

ＤＥＸ　６

ＷＩＳ　６

ＩＮＴ　４

ほーほー。これってどうなんだろう。ＬＶ２で多いのか少ないのか。
まあそのうち判るか。

ということで、もう２０匹ほど休憩を挟みながら倒して見事マリブーの篭手　防御＋１をゲットしたのでした。
なんかふわふわで可愛い。
ちなみにＬＶは３になりましたっと。

6（前書き）

お気に入り登録、評価ありがとうございます。

6

さて、歩いて5分もすると小さい町が見えてきた。
本当に小さい町だ。家も１０件ほど。その中でもひときわ大きい建物がきっと町長さんの家に違いない。いつの世も権力者が一番金持ちっていうのは王道よね。

さすがに町に入るとちらほらプレイヤーも歩いているようだ。
確かこのゲームは発売が３週間前なんだよね。
ゲームの中では１時間が１日だから、えーと、ゲーム換算で５０４日か。まあずっとこの世界にいる人はいないにしても、ほぼ１年が経ってるってことだからあまり初心者ゾーンに人はいない。

「そういえば、ルーナって他の人にもついてるの？」

側で飛んでるルーナに疑問をぶつけてみる。

「いるよー。でも全員は無理だから１０人の妖精が手分けしてるんだよ。もちろん一人でたくさんの人を面倒みてるんだな。一度に何箇所にも同時に私がいることもあるけど、他の人の妖精は見えないからわからないと思うよ」

「ふーん」

「でもって無事に町の中に入れたことだからこれで私は一旦消えるよー。何かあったらシステムから呼び出してね」

「えー、けちけちせずにいてよ」

「これでもけっこう忙しいの。必要なときとフィールドゾーンやダンジョンでは勝手にでてくるようになってるから。んじゃまたね」

フッと消えてしまった。まあしょうがないか。
くるくる回りを見渡しながら歩く。
他の建物のうち何件かは目の前に看板がでている。
きっと道具屋とか武器屋なのかな。そんな絵が描かれてるもんね。

しかし、他のプレイヤーから妙に見られているように感じる。
やっぱり麻の服はダサいのかしら・・・。
ちょっと肩身の狭い思いをしつつ進んでいくと大きな建物の前についたー。

「たのもー」

ええ、言ってみたかっただけです。
どうやって中に入ろうかなって思っていたけど、家の前にいい服を着たおじいちゃんが立っていた。
町長なんだろうねー。無用心な。

「町長さんですかー？」

「おぉ、あなたは新しい冒険者の方ですね。ようこそ初心者の町にいらっしゃいました。歓迎いたします」

「どもども」

「では、早速この町に慣れていただく意味も込めて、少しお使いに行って来ていただけないでしょうか？」

「いいですよー」

「では、このカードを武器屋と防具屋、道具屋さんにとどけてきてくれますか？」

「ほーい」

最初はお使いクエストですか。オーソドックスですね。そりゃ妖精も退屈だわなってことで、さっそく街中に歩いていくのでした。

7

小さい町なのでテクテク歩くとすぐに武器屋を見つけることができた。
ショーケースの中にカードの状態で武器を売っている。

「へい、らっしゃい」

「こんにちはー」

「ねえちゃん、新顔だね」

いかつい顔をした筋肉モリモリのおっちゃんが声をかけてきた。

「はじめたばっかりなんですよー」

「そうかそうか。初心者の町なんで初心者だらけだけどな、がっはっは」

えらい豪快なおっちゃんだ。

「お使いです。町長さんからカードを届けに来ました」

と手に持っていたカードを1枚渡す。

「よし。しっかりと受け取ったよ。変わりにこれをもってきな」

ピコンと音がすると、またしても武器屋のカードを手に入れたとの声が聞こえた。

きっとバッグに入ってるんだろうなー。

「ついでに武器の説明もしておいてやる。うちにおいてあるのは短剣、片手剣、両手剣、槍、斧、弓と矢だ。どの種族でもどんな武器でも持つことができる。特別な物を除いてＬＶ制限、スキル制限は無い。どんどんいい武器に持ち替えていきな」

「ほうほう、でも結構高いよね」

さっきバッグオープンで見た所持金は１００ゴールドだったから、どれも買えそうに無い。
一番安い短剣の安っぽい短剣でさえ、なんて名前だ、３００ゴールドもするのだから。
マリブーはお金を落とさなかったため所持金は最初にもらえるお金しか持ってない。

「なにいってるんだ。ここの商品は武器屋の中では一番安い部類だ。がんばって稼ぎな」

「そうだねー」

とっととこのクエ終わらせて狩りしないとなー。
あとは露店でゲットするくらいしかないのかなあ。

その後、防具屋と道具屋を回り、無事に防具屋のカードと道具屋のカードをもらうことができた。
防具も好きなのを選べばいいみたいだけど、防御力が高い重鎧はすばやさが遅く、服やローブはその反対ということがわかった。この辺は普通のＲＰＧと一緒だね。

あと、装備アイテムのベルトにはカードを差し込む場所があるそうなので緊急性の高そうなものは入れておくといいらしい。売ってなかったけどね。使えない。。。

お金が少ないから何も買わずに町長のところに急いでいると急に後ろから声をかけられた。

8

「ねえねえ、君、ギルドに入りませんか？」

振り返ると

「うわっ」

と声をだして人のよさそうな顔の男の人がびっくりした顔で固まっていた。

どうしたんだろう。

「わたしですか？」

一応聞いてみる。

「あ。うん。えと・・・。」

気を取り直したように話しかけてきた。

「綺麗だね。びっくりしちゃったよ」

「はぁ」

ん？ああそうか、そういえば私ってば美人さんに変身してたなー。

もしかして、周りから視線を集めているのは私が綺麗だから・・・

なんてね。あっはっは。

「ギルドですか。特に決まりってありますか？」

「あ、みんな仲良くってくらいかな」
「んじゃ、体験で入ってみます」
「ずいぶんアッサリだね」
「楽しそうだから」
「ん、じゃあシステムブック出してね」
言われてシステムブックを取り出すと画面にメッセージが表示された。
ギルド：幻影騎士団から勧誘を受けています。入りますか？
う、なんてこっ恥ずかしい名前のギルドなんだ・・・。頭を抱えて悶絶したくなる。
この名前が意識したら見える名前の上に来るわけですか。
どうどうとこれを掲げて生きていけと・・・。
ギルド名くらいは聞いておくべきだったよね。
やっぱりやめますって言おうかと思って目の前の人をチラッとみると、ニコニコしている。
そうだよね。入ってくれると思っちゃってるもんね。
「変わった名ですね」
「ん？そう？僕がこのギルドのマスターなんだけどね。この名前は友達と3日かけて考えたんだ」

「そ、そうですか」

ここでギルド名がちょっとなんて言える人間は少数に違いない・・・。

清水の舞台から飛び降りる気持ちで、はいを選ぶ。

ギルド幻影騎士団に入りましたのメッセージが聞こえる。

「ようこそ。よろしくね」

「よろしくお願いします」

「システムの設定のギルドボイスをオンにするとギルドのみんなに声が届くし、みんなの声も聞こえるようになるからね。やってみて挨拶をしてみてる？」

ポンポンと画面を指でたたきつつ操作するとギルドボイスオンにできた。

えーと、ギルドボイスオンにしている人は１８人か。結構多いんだね。

ギルドボイスがオンになりましたとの声が聞こえたかと思うと急にガヤガヤしゃべっている声が聞こえるようになってびっくりした。

「あーあー」

ついついマイクのテストみたいにしてしまう。

同じようにシステムをいじっていたマスターにくすっと笑われてしまう。

なんか恥ずかしい。

しかもシンとしてしまった。なんか緊張するなー。

「はじめまして。はじめたばかりのＬＶ３のエルフるしふぇです。体験で入隊しました。よろしくお願いします」

「初心者の町で勧誘しました。めちゃくちゃ美人のエルフさんだよ。みんなよろしくしてあげてね」

「マスターどこで口説いてるんだよ。最近見ないと思ったらそんなとこまで足を伸ばしてたのか」

「ギルド員増やしたいしね」

「ねえ、美人なの？」

「え」

なんて答えようかと思っているとマスターが勝手に答えてしまう。

「みとれちゃうくらいにね」

「おー、なんか見てみたくなった」

「俺も」

「私も」

「いっちゃうか」

え・・・。なんか大事になってきちゃったなーと思いつつ。どんどん初心者の町までやってくるお話になってしまった。これないって言った５名を除くと１３名！

この町の人口が一気に増えちゃいそうです。

「えーと、みんな来るみたいだから、来たらまた紹介するね」

「え、えと、見たらがっかりするかもしれませんが・・・」

「ないでしょ」

マスターは軽くいなすし・・。

そりゃ美人になってるのは知ってるけど、そこまで自信満々になれないよ。小市民だしね。

「大丈夫だよー。そのときはみんなでマスターをぼこるから」

「あ、あはは」

ま、マスターの責任になるならいっか。

「あ、町長さんに報告するクエの途中でした。みなさん来るまで時間かかりそうなら行って来てもいいですか？」

「いいよー」

「おk」

と、了承の声。よし、行って来ようっと。

「あ、ギルドチャットはオンになってる限りずっとしゃべっている内容はギルド員に聞こえちゃうし、ギルド員の声も聞こえるからおしゃべりをしたい気分じゃないときはオフにしておいてね」

「みんな来る人は初心者の町の入り口集合で」

「えーとじゃあ、報告したら入り口に行きますね。それまでは切っておきます」

ギルドチャットを切るといってらっしゃーいと手を振るマスターに軽く手を振って走り出す。

町長のとこ行かないとね。

なんか緊張したなー。

9

待たせたら悪いし、と少し小走りになりながら町長の家の前まで来た。
相変わらず町長は家の前にのんびりと立っている。
雨の日はどうするんだろう？
ちょっと気になりながらも、話しかける。
「町長さん、お願いされたカードを渡してきましたよ」
「おぉ、るしふぇさんですね。ありがとうございます」
ちゃらららちゃらーんとおなじみの音楽とともに体が光に包まれる。
武器屋のカード、防具屋のカード、道具屋のカードが消えましたとの声が聞こえた。
クエスト達成の経験値が入ってＬＶアップしたのかなぁ。これでＬＶ４だね。
「これでこの村のことは一通り解かったと思います。しかしまだるしふぇは初心者ですから、この村の周りで敵を倒して経験をつむのがいいでしょう。村の北にある洞窟には強い敵がいるから装備が整わないうちには入らないようにしてくださいね」
ふむふむ。
それは装備が整ったら北の洞窟に行けってことですね。
しかし腰の低い町長だなー。

「さて、このベルトを差し上げます。がんばってくださいね」

初心者のベルトを手に入れたとの声が聞こえた。
ここで貰えるようになっていたのか。
クエ受けて正解だったね。

「ありがとー」

お礼を言い、さっそくバッグを開けて装備する。
スロットが2個だけ開いている。ここに挿しておくと取り出すだけでカードが実体化されるので戦闘時にいちいちバッグを開いてアルケマイズ　キャンセルと叫ぶ必要が無い。しかもポーションなどは一つづつ実体化されるという優れもの。

早くポーション入れてみたいな。でもお金が無いしなー。
なんとなく、さっきカード化した砂のカードを取り出してさしてみる。
意味無いけど。

じゃあそろそろ村の入り口に行かないとねー。

「じゃあ町長さん、またねー」

挨拶をすると村の入り口に向かって走り出すのでした。

１０（前書き）

評価、お気に入り登録、感想ありがとうございます。嬉しいです。

10

村の入り口まで行ってみると、ギルドマスターが背の高い男の人と立っていた。
近寄っていって声をかける。

「おまたせしました」

「お帰り」

にこっと笑うマスターは優しげな人間の男の人。顔が整っているわけじゃないけど、なんというか雰囲気がちょっとだけ二枚目っぽい。それと対照的に、側にいた男の人ワイルドな感じ。ちょっと目がきついくて、全体に毛深い。大きな斧を背負っているとこをみるとファイター系なのかな。
目を見開くとニヤっと笑った。

「ひょ～びっくりしたぜ、こりゃー本当に美人なエルフだな」

「あ、ありがとう」

ちょっと引きつつ一応お礼を言ってみる。

「おい、ラジェ、いきなりその挨拶はないだろう？」

マスターがたしなめてくれる。

「ん、そうか。そりゃー悪かったな。俺はラジェって言うんだ。よろしくな」

「よろしくお願いします」

ペコッとちょっとだけお辞儀をしてみる。

「こいつは、こう見えてすごいプレイヤーだよ。なんせ普通はパーティーで入っていく洞窟に単騎で乗り込んで行って帰ってくるから・・・」

「く～、かわいいな。このゲームしててよかったぜ」

マスターの言葉をラジェさんが遮った。

「は、はぁ」

「そうだ、ちょっと待てな」

そういうとバッグオープンという掛け声とともに、いそいそと空中から2枚のカードを取り出した。

他の人のバッグの中身は見えないからまるで手品のようだ。

「ほら、これを装備してみな」

ぽんとカードを渡される。

「お、おまえ、カード渡すときはシステムのトレード使えよ。危ないだろう」

「まーまー、これを横取りするようなやつは俺が斧の錆にしてやるよ。さあさあバッグに入れて装備してみなって」

「は、はぁ」

バッグに入れてみる。えーと、メイドリンローブの上と下か。え、防御力＋３０と＋２０？？？
そのほかにもなんか色々と書かれてる。これってすごい装備なんじゃ・・・・。
ワクワクしているラジェさんに追い立てられるように指をカードに乗せる。

「そ、装備」

そのとたん、服が黒いローブに変わった。

「うぉーーー！！エルフのメイド最高ーーーーーー！！！」

ラジェさんの激しい雄たけびが聞こえる。
な、なに？？？
ギルドマスターもなんか赤い顔をしてこっちを見ている。
え、え、え？？と助けを求めてみると、困った顔をして視線をそらされてしまった。
なんなんですか？・・・・。
しかも周りからもえらい注目浴びてるし。

自分の体を見下ろしてみると、上下とも黒が基調となったシックなドレスだった。ちょっとスタイルがよすぎて胸が苦しいけど。腕は七部袖で足はくるぶしの上までで露出も少ない。ほっと一安心。
男の人が叫ぶくらいだから、めちゃくちゃ際どい服着せられたのかと思っちゃったよ。

一見お葬式でも行きそうなくらい黒い。
ただ、ところどころに白と黒のフリルがあしらわれ、胸のところに落ち着いた赤色のボウリボンがついているので、全体的な服の印象としては暗くなく、むしろ可愛い。む、私この服好きかも・・・。

しかし、どこがメイドなんだろう？
メイドってあのメイドだよね。たしかミニスカでめちゃくちゃフリフリで・・・。この服はむしろ上品な感じもするし、メイド喫茶に登場しそうな感じはしない。

「メイドですか？」

コクコク頭を上下にふりながら肩をポンポン叩かれる。

「いいの、いいの。気にしない気にしない」

なんとなく腑に落ちないけど、まあいいのかな。

「はぁ」

「それより、この服欲しくない？」

悪巧みをしたような顔をして聞いてくる。

「欲しいですけど、始めたばかりでお金無いですし、なんか注目集めてますし・・」

「ノープロブレム！ノープロブレム！！」

叫んでるよ。テンションが高すぎてついていけない。

「エルフにメイド服、これを着せてあげないなんて世界に対する冒涜だ！！」

「は、はぁ。メイドリアンローブですけど・・」

周りの関係ない男性たちまで雄たけびにおーなんて答えてるのが、怖い。

「これはお兄さんのお願いを聞いてくれたらあげよう！」

「はぁ」

何お願いされるんだろう。もう限界まで心がヒキヒキなのにそろそろ気づいて欲しい。

「写真とらせて」

「はぁ」

この世界では写真をシステムで撮ることができるのだけれど、許可しないと撮っても人が写らないようにできている。ゲームのキャラとはいえ自分の分身だから、勝手に撮影されたくないという意見を反映したもののようだが・・。というわけで、ラジェさんが私を写そうとしたら私の許可がいるわけなんだけど

「そんなことでいいんですか？」

「もちろん！」

「下着姿で、とか下着が見えるような怪しい写真とかじゃないでしょうね？」

あやしい。高いものには訳があるに違いない。
しかし、そうは思うものの、この服欲しいなー。

「ばかなことを！服を着ている写真だから意味があるんじゃないですか！」

「はぁ」

「そんなことをしたら、すぐにセクハラでＧＭ呼んでいただいて結構です！」

確かに、一定以上の恐怖を感じたりすると勝手にＧＭがでてくるようになっているし、これだけ言ってくれるなら大丈夫かな。

「えーとじゃあ、許可します」

システムをいじくってラジェさんに許可を出す。

「ひゃっほー！」

さっそくシステムの機械をカメラにして私の周囲を回りながらパシャパシャ写真をとる。

「いいねー、いいねー。最高だねー」

はやまったかもしれない・・・。

「服はもらっちゃいますよ」

「おっけー、おっけー」

まぁ、しょうがないか・・・。でもなんかヤダなー。

「二人とも、そろそろアーチェがみんなを運んでくるはずだよ」

マスターが言ってくれるまでラジェさんは壊れてました。

11

ブンと空気が振動したかと思うと、目の前に一つのグループが現れた。

「お、アーチェご苦労様」

にこっとマスターが手をあげる。

真ん中にいた白いローブの人が軽く手を挙げかえしながら答える。

「どういたしまして」

すごいなー。みんなを移動させるようなスキルもあるんだね。

というか、一気に私のほうを注目するのはやめてほしい。

「エルフのメイド・・・」

誰かがつぶやいていた。え、やっぱりこの服メイドに見えるの??

キョロキョロみんなを見ると、すっと男性人は目をそらす。

な、なんなのよ・・・。

「ねえねえ、それって超レアなメイドリアン装備でしょ。なんで初めたばっかりの初心者が持ってるの?」

動きを止めつつ、そっとこちらを伺う男性人とは対照的に、その中にいたピンクの髪のエルフの女性が口を開いた。こちらを見てしゃべりつつも、青い髪をしたおとなしそうな感じのハーフエルフの男性にぴっとりくっつくように腕に手を回している。

う、ベッタリだね・・・。ちょっとヒク。
しかも、粘着質なしゃべり方は、正直同性には受け入れがたい感じ。
やっぱりピンクって選びやすい色なのかな。かわいいしね。
しかし、目の色も青いし、こっちは緑青だからちょっと違うけども、
なんか私とかぶる色だなー。
私が美人のキャラだけに、なんとも申し訳ない感じ。
どうにかこの高まっているヘイトを低めねば・・・そう思案しつつ
口を開く。

「えーと、ラジェさんが写真を撮りたかったそうで・・・着させて
いただいています」

貰ったことは言わないでおこう・・・。
そういう気持ちが通じたのか、ラジェさんがフォローしてくれる。
空気読めるんだね！意外だったよ！

「そうそう、レアすぎて売れないんで写真のお礼に貸してるんだよ」

ナイスです！

「そうなんだ。いいなー、かわいいなー、きてみたいなー」

食い入るように見ないでほしい。
でもこれは、写真を我慢した自分への御褒美なんだから、無視しよ
うっと。

「みんな、紹介するよー。この子が今日入ったるしふぇさん。いろ
いろ教えてあげてね」

スルー率高し！なマスターがさらっと空気を断ち切る。
それとともに男性人もバラけて周りに集まってきた。

「よろしくお願いします」
ペコっと頭を下げる。

「じゃあ、軽く自己紹介していってね」

少し入り口から離れたところでおしゃべりをはじめる。
いつの間にか夕方になってきていた。

「まずは僕から。マスターをしているキースです。何か困ったことがあったら言ってね。人間で魔法戦士を目指している感じかな」

そいえばマスター名前聞いてなかったね。

「俺は今更だし、ラジェだ。よろしくな」

うん。ラジェさんはもう忘れようもない・・・。

「僕はアーチェ。魔法使いやってます。種族は人間。よろしく」

みんなを運んできたアーチェさんは人間なんだね。てことはもしかしたら転移魔法って種族固定だったら使えないね。後で聞いてみようっと。茶色い髪に茶色い瞳のアーチェさんは少し無口な感じだけど、人当たりのよさそうな雰囲気なので質問もしやすそうだ。

その次はちびっこちゃんダークエルフ2人組だった。
「僕はデールだよ」
「私はチップ」

このゲームは身長は現実の自分と同じくらいになるように設定されているので、二人は小学生くらいかもしれない。１８歳未満は一日の接続時間も制限されているはず。
「ん？チップは女の子なの？」

「うん。デールとは兄弟なの。よろしくね」

にこっと笑うと愛嬌がこぼれるようで可愛い。
同じくにこっと笑い返した。

「よろしくね」

周りの男性が赤くなってたけど、んー、はやく慣れてねとしか言いようがない。

次がさっきの粘着質女性だった。

「姫ちゃんです。ヒールが得意などぢっこエルフです」

もう、どっからどう、突っ込んでいいのかわからんよ・・・。
これは俗に言うロールプレイイングってやつなのかな。そういうキャラを演じてるっていう・・。
本気だとしたら恐ろしすぎる。
ラスボスを目の前にしたような戦慄を感じつつ、じっと見ていると
となりの男性が赤くなった。
それを半ば本気でつねりつつ、痛そうだな・・・、続けて言った。

「となりのハーフエルフ、銀河君と付き合ってます！」

そのとたん、周りがドワッと沸いた。

「散々否定してたけど、やっぱり付き合ってたのか」

「やっぱりな」

「おぉおおおお」

みんなが一斉にしゃべるので聞き取れない。
しかし、どうやらみんなには内緒だった模様。
嫉妬のあまりに言っちゃったということだろうか。

「言わないっていってたのに」

恨みがましそうな目でみている銀河君。君その女性を選んだ時点でもう終わってるから・・・。
しばらく沸いて収集がつかなくなったのもあって、その後の自己紹介何名かは正直覚えていない。

全員は覚えられないって。あっはっは。
まあ名前は意識したらキャラの上に見えるし、問題ないよね。

粘着さんとは別の、まともな女の子がいたのはすっごく嬉しかったけど。

「私はダークエルフのミーシャです。歌って踊れるファイターを目指しています。よろしくね」

粘着があまりにあまりな挨拶だったので、非常に好感が持てましたよっと。
思わず手を握ってブンブンしながら

「よろしくね！！」

と言ってしまった。

プッと笑われちゃったけど、なんか波長があいそうだし、いい友達になれそう。

ＬＶ高そうだけど・・・。

そうこうしつつも最後の一人の自己紹介になりました。

12

さて、最後の一人に目をやると、黒髪黒目のメガネの男の人間でした。
手になんか持ってます。

「僕はカイザー。てことで、はい。これ」

目の前に差し出されたのは猫耳でした。
ネコミミ!!
意味わからないし!

「帽子装備してないよねー。これあげるよ」

にこっと人のよさそうな顔で言ってくる。
帽子はないけど・・・なぜに猫耳??ラジェさんのお仲間か??

「えぇぇぇぇぇ、ずっるぅううい。それもレアアイテムじゃん。姫ちゃんもずっと欲しかったのにぃい」

粘着女がにじり寄ってくる。

「さすがだ!カイザー!!よくわかってるじゃないか!」

ラジェさんがまたテンション高くなって壊れてきている。
あぁああ収集がつかなくなってきてるよー。

「お礼は言ってね」

カイザーさんが要求してくる。
まだ貰うとも言ってないんだけど・・・。しかし、帽子もほしいしなー。猫耳もけっこう可愛いよね。
コスプレには抵抗あるけど、レア装備か・・・。

「ほら、はやく、ありがとうご主人様って言ってみてよ」

ぐっ、やはり貴様もラジェの仲間か・・・。

「ありがとうご主人様〜、ありがとうご主人様〜」
粘着さんがカイザーさんを上目遣いに見上げて、お礼を言っているのを見事にスルーして

「ほら、はやく装備してお礼言ってよね」

急かしてくる。
なんてカオス！！

これくらいならわざわざバッグに戻さなくても直接付けれるかな。
こんなときになんだけど、拘りのある人は服なんかもいちいち普通に着るみたい。
バッグに入れて装備したほうが楽なんだけどね。

ってそんな逃避してる場合でもないか。
粘着はますますキレてきてるし・・・奪われかねない。
女は度胸だ！

猫耳を装備すると、

「あ、あり・・・、あ・・・、やっぱり言えないーー！」

がんばってみたけど、こんな衆人環視状況でそんな台詞言えないよ。
恥ずかしくて真っ赤になっていると、またしてもラジェさんがパシャパシャ写真を撮っている。

やっぱ、返すか。
そう思ったら、カイザーさんになぜかニコッとすごい神々しい笑みで微笑まれ

「どういたしまして」

ん??? いいのかな??
冗談だったのかな。

ラジェさんはカイザーさんをバンバン叩いてグッジョブ言ってるけど・・・。

「ありがとう」

普通にお礼を言ってみる。
ギュッとなぜかミーシャさんに抱きしめられていたりして。

「え？　え？」

びっくりしていると

「もーーー！かっわい～～」

さらにギューっとされてしまった。
ミーシャさん。胸が大きすぎて息が苦しいです・・・。

その後しばらく、ラジェさんはパパラッチも顔負けの動きで写真をとりまくってました・・・。

13

ずっとスルーされ続けた粘着さんが切れてしまったのも当然の成り行きかなとも思うんだけど・・。

「なんで！姫ちゃんのこと無視しないで！」

今までちやほやが当たり前だったのか、ぼろぼろ涙をこぼしている。

ちょっと可哀想になってきた。

「無視してないですよ。姫ちゃんさんは素敵な彼氏がいてうらやましいです」

話題を変えておこう。

「彼氏さんとはどこで知り合ったんですか？」

「え、えぇとぉ」

知りたくもないけど、言いたいことをしゃべらせてあげないと爆発するタイプだよね。

「この初心者の町で知り合ったんだよー」

「まぁ、そうなんですか。じゃあ久しぶりにもう一度ここに来てそのころの気持ちが蘇ったりしません？」

「え、えぇぇ、キャッ、そうかも～」

「二人でデートしてきたらどうですか？」

「え、ん～、いってくる～」

はい、排除完了っと。

そうこうしているうちにあたりは暗くなってしまいました。

とはいっても回りは見えるし、真っ暗ってわけではない。

「そういえば、なんか夜になるの早い気がするんですが」

「あぁ。一日は体感で８時間だからね」

親切にアーチェさんが教えてくれた。

「夜にだけ現れるモンスターもいるし、夜にだけある植物もあるから夜も冒険を満喫するためみたいだよ」

なるほど。

いくら現実の一時間が一日といっても体感までそうだと夜に眠くなっちゃうもんね。

星まで再現されているんだ。綺麗だなー。

小さい町からギルド員といっしょにしゃべりながら星を眺めるのも悪くない。

誰かが焚き火をおこしてくれた。

姫ちゃんさんもなんとかご機嫌をなおしたのか、彼氏と一緒にと星をみている。
ちょっとみんなから離れたところでロマンチックな気分になってるみたいだ。

さて今のうちにもう一度ステータスを確認しておこうっと

キャラ名　るしふぇ

ＬＶ５

装備

武器　初心者の短剣　攻撃＋１

帽子　猫耳の帽子　防御＋１５　ＤＥＸ＋５
ＩＮＴ＋２　ＭＰ回復＋５

胴　メイドリアンローブ（上）　防御＋３０　ＩＮＴ＋３
ＷＩＳ＋１ＭＰ回復＋５

腰　メイドリアンローブ（下）　防御＋２０　ＷＩＳ＋３
ＩＮＴ＋１ＭＰ回復＋２

メイドリアンローブセットボーナス　ＨＰ＋１０
０　ＩＮＴ＋１

ベルト　初心者のベルト　スロット２個

手　マリブーの篭手　防御＋１

足　マリブーの靴　防御＋１

ステータス

ＣＯＮ　６
ＳＴＲ　６
ＤＥＸ　１２（１７）
ＷＩＳ　１０（１４）
ＩＮＴ　６　（１３）

（　）内は防具のボーナス込みの数字

なんというか・・・ＬＶ５の防具じゃないような気がします・・・。

まぁ、いっか。
自分でもがんばってそろえていこうっと。
武器を買わないとなー。
でも所持金１００ゴールドだからなー。まずはそのあたりの敵を狩らないとな。

ふっとスキル欄を見ると、見たことのないスキルが入っていた。
えーと・・・メイドリアンローブを着てるとき限定みたいだね。
武器はたきを装備したときに・・・武器はたき・・・・はたき？？？そんな武器があるのかよ！！
すでに弱そうなんですが・・・。
えーと、はたきスマッシュが使える。

微妙だなー。
これ使えることはラジェさんとカイザーさんには言わないでおこう。
どこからか、はたきを持ってきそうだし。

「さー、肉だしたぜー。焼いて食うぜー」

ラジェさんは焼き肉の準備をはじめている。

この世界に来て最初の夜がこんな楽しいものでよかった。

14

一夜明けて、野原です。

えぇ、防具はすばらしいんだけど、武器が武器なので、ここはやっぱり地道に狩りでしょう。

ということで、みんなとお別れしてから地道にその辺のウルフなんかを狩っています。

「グルルルル」

3，4匹に囲まれてしまっている状態だけどちっとも怖くない。

なぜなら、噛みつかれてもちっとも痛くないから・・・。

甘がみに感じます。とはいえ、最初はすごい顔で噛み付いてきたからぎょえーーって叫んだんだけど。

「ちょっと見ない間に、どうしたのよ。その防具」

呆れた顔でポエポエ浮いている妖精は無視です。

とはいえ、1匹あたり3〜4回はヒットさせないと消えないわけで、なかなかに激しい運動です。

よけつつ、受け止めつつ。

噛まれたらそれはそれで防御力のスキルがアップするし、避けれた

ら回避スキルがアップするわけで、しかもなかなか倒せないからどんどん仲間に取り囲まれていきます。

ふぃいい、ウルフ８匹くらいに増えてきたし。

まるでスキル上げのために敵に囲まれているようですが、こちとら必死です。

マネー、マネー。

魔法武器のためにマネーを落とせや、ごらー。

なんか皮とか牙とかもいつのまにかゲットしてるみたいだけど、まずは金よね。

そうこうしていると、さらに１５匹と敵は増えてくる。仲間意識があるのね。

どんどん倒しているとＬＶアップの光が何度か瞬いた。

だんだん武器の威力が増してきて、２撃くらいで倒せるようになってくる。

あと、慣れてきたのか、敵の呼吸がわかってきて飛び掛ってきたのを避けた瞬間に首を狙って短剣を突き刺せるようになってきた。

周りの敵には噛まれてるけど・・・。

それでもだんだん周りの敵が減ってきてるのを見るのは楽しい。

かれこれ2時間くらいウルフと戯れていると、ウルフを１００匹倒しました。特殊バッシブスキル、ウルフの足を手に入れました。とのアナウンスが流れた。

なんじゃそりゃ・・・。

「おー、特殊スキルおめでとう」

「ちょっと、なんなのよこれ」

「システムで確認したらわかるけど、いつでも少しだけ足が速くなるスキルね」

「ほえー、結構便利なのね」

「そうね。普通は序盤には強い敵だからパーティーで組んで倒すし、一人で倒せるようになるころにはここにいないしね。あんまり持ってる人も少ないと思うよ」

「そりゃそうだ」

なんとなくうれしくなったので、さらにウルフを倒していく。

最後の一匹を倒さずに引き回して走ると案の定周りのウルフが釣れる釣れる。

夢中でどんどん屠っていく。

15

そうしているとプルルルと電話のような音が鳴った。

「ん？これなんだろう？」

不思議に思っていると妖精が答えてくれた。

「囁きチャットの要請ね。システムで確認できるわよ」

ほうほう。ウルフを屠りつつ確認してみると姫ちゃんの文字が・・・・。

んー。無視していいかな・・・。

明らかに面倒くさそうな粘着からの囁きに・・・・はい、好奇心がうずいてついとっちゃいました。

「あ、つながった～。姫ちゃんだよぉ～」

う、早くも後悔が・・・。

好奇心が人を殺すというのは本当かもしれない。

しょうがないので片手間にウルフをどんどん屠りながら返事する。

「あー昨日ぶりです。どうかしたんですか？」

「えとねぇ、すっごい一大事なの」

「彼氏と喧嘩でもしましたか？」

「えええ。言ってないのになんでわかるのぉおお」
イラッとしたのでウルフにザクザク短剣を突き刺す。
そんなことだろうと思ってたけどね・・・。
「あのね、今日ね朝起きて、ご飯はねパンを食べたんだよー。それでね、服を着替えて～今日のお化粧は～・・・・」
よし、あっちのウルフも釣ってこよう。
そろそろ会心がでたら一撃で倒せるようになってきたね。
次の敵を狩りに行きたいけど、片手間じゃあそこまでできないしなあ。
はやく囁き切りたいけど、これは3時間はかかるコースだなー。
「それでねー。待ち合わせ場所にいったら～彼は今日も格好いいのねーそれでね～・・」
よし、避ける練習もしながら倒していってみう。
一定の時間ごとに攻撃してくるから大分見切るのも上手になってきた。
攻撃してきたやつをカウンター攻撃で倒していく。
ん～わたし上手！
「あ～そういえば、彼氏さんとは現実でもお付き合いされてるんですか？」
ぶった切って気になることも聞いてみる。
「え～、そんなわけないよ～。旦那いるし～」

「あ、そうなんですか。旦那様とは一緒にされないんですか？」

「え～、ぜったいイヤだよぉ」

現実に旦那さんがいるのか。こんなの選んだ時点で終わってるよね。
まあ、このキャラのままとも限らないけど。

「そんなことよりもね～。姫ちゃんのこと今日は褒めてくれなかったんだよぉ～」

「はあ」

あとは何も聞かずにどんどんウルフだけに集中していく。

こういうタイプは別に聞いてなくてもいいんだよね。ただ自分が話したいだけだから。
現実だと受話器をそのへんに放置しておくんだけど・・・。
ホント壁にでも話しかけてほしいものです。

散々粘着がしゃべっている間にウルフが消えていく。
ＬＶアップもさらに果たし、そろそろ３時間くらいたったかなというあたりでまたしてもアナウンスが流れた。

ウルフを５００匹倒しました。特殊バッシブスキル、ウルフの足（改）を手に入れましたとのアナウンスが流れた。
んーと、さらに足が早くなるのか。

足が早いのは便利だねー。
みんな知ったらこの辺はもっと混雑するんじゃないかなぁ。

そうこうしているうちに姫ちゃんは満足したらしい。

「あ、彼から囁ききたやー。切るね」

ぷちっと突然切られた。

次からは絶対に囁きは取るまい・・・。

16

なんか釈然としないものを感じつつも、気を取り直す。
いつの間にかＬＶも９になっていた。お金のほうは、えーと現金が大体６０００ゴールドか。
あとウルフの毛皮と牙が２００枚くらいづつ。

これだけあればそろそろ武器が買えるかなぁ。

ギルドチャットをオンにしてみる。

「こんにちはー」

「お、るしふぇか」

「るーちゃん、こんにちは」

「よー、がんばってるか？」

「えーと、ちょっとお聞きしたいんですが、武器でお勧めのものってありますか？軍資金は６０００ゴールドにウルフの毛皮と牙が少々なんですが」

「ん～、何をやりたいかによるかなぁ」

「ウルフの毛皮は革製品の生産やるなら持っておいたほうがいいよ」

「生産は今のところ考えてないです。魔法をやりたいんですが、この町では売ってないみたいなので・・・」

「北の洞窟にはもう行ってみた？」

「まだです」

「確か北の洞窟で武器が宝箱に入ってたようなきがするなー。がんばって貯めたお金だろうから大事にしたほうがいいかも」

「そうなんですか。じゃあそれまでこのまま頑張ってみようかなー」

切れ味の悪い短剣だけど、このまま洞窟までいっちゃうことにしよう。

ギルドチャットを切ると町の北の洞窟に向かう。

「は～。もう洞窟かー。早いわねー」

ルーナが呆れて着いてくる。

てくてく森を抜けていくといかにもそれっぽい洞窟が見えてきた。

17

洞窟の前に誰かがいる。
ＮＰＣかと遠目に見えたそれは男性のプレイヤー２人だった。
さらに言うとラジェとアーチェさん・・・。
なにしてるんですか、あなたたち。

「お、来たな」

ラジェさんがにやっと笑いながら片腕をあげた。
アーチェさんは困ったようににこっと笑っている。

「お二人とも何をしてるんですか？」

「ん、ギルドの新入りを助けてやろうと思ったんだよ」

「あやしいです・・・」

「何言ってるんだ。助けるさ。この男がね」

バンとアーチェさんを叩く。

「ラジェさんは何をするんですか？」

「ん、そりゃあ写真撮影に決まってるだろ」

「え・・・まじですか・・」

「まじまじ。じゃあがんばっていこうか～」

ジト目で睨んでも効果なし・・・。
この人高レベルなのになんでこんなことに情熱傾けるんだろう。
しょうがないので、そのまま洞窟に入っていく。
どうせ初心者用の洞窟だろうから、問題なく進めるでしょう。

シャッターをきるラジェさんを極力脳内から追い出して、どんどん進んでいく。

細長い廊下にはときどき松明がついていて、歩きやすい。
向こうからこちらにスライムが溶けたような水っぽいモンスターが近づいてきた。
タイミングを合わせて短剣を突き刺す。

んと、ポイズンスライムか。毒持ってるかもしれないね。
とはいえ、何も持ってきてないので、必死で短剣を突き刺す。
5回ほど刺したところでやっと倒せた。なんとか毒にはかからずにすんだかな。
ふぅっと息をつくと、横からパシャ。
人が必死で戦っているのに、なんかイラっとしたのでスライムの切れ端を投げつける。

「うぉ、レンズが汚れるだろ」

いつのまにカメラマン魂を習得したんだ・・・。

しょうがないのでそのままどんどん進んでいくと、1匹づつスライムが現れ、そのたびに撃破していった。
ピコン、短剣スキル、ダブルアタックを手に入れましたとのアナウ

ンスが聞こえる。

「あ、スキルを手に入れたみたい」

「お、やったな」

「よかったね」

「スキルを手に入れたわね。アクティブスキルは技の名前を宣言するか、タイミングよく体を使うかで発動するわよ。最初は宣言して勝手に体が動くのを覚えるのがいいわよ」

妖精ルーナが補足説明してくれる。

よし、ちょうど向こうからやってきてる敵がいるから使ってみよう。

「ダブルアタック！」

体が勝手に動いて敵に2度の攻撃を与える。なるほど、このタイミングを覚えるのが難しそうだわ。

「ひゅーひゅー、いいねいいねー」

気が散るしね・・・。

18

ダブルアタックを手に入れてから殲滅力があがったようで、戦闘にかかる時間が減ってきた。

「ダブルアタック！」

初撃に使うとしばらく再使用まで時間がかかるようだけど殲滅途中でどんどん宣言していく。

ポイズンスライム5匹に絡まれてるんだけど2匹まではなんとか倒せた。

ブヨブヨしている体から液体状のものを飛ばしてくるのが気持ち悪い。

できる限りよけているんだけど、あと3匹。どうしても隙ができてしまう。

かすった左手がビリビリってしたかと思うと体が緑色になってしまった。

なんだこれはああ。

「ひー。体が緑になっちゃった」

「おー毒にかかったな。シャッターチャンスだ」

シャッターチャンスだ、じゃないよおおお！

必死で短剣を振るう。

毒、毒っていった？

ＨＰバーがどんどん減ってくる。
いままでどんだけ攻撃受けても大丈夫だったのに！！
毒ってもしかしてＨＰの何％って感じにどんどん減っていくのかしら。
ピーンチ！！だったＬＶ低いからＨＰそんなにないよー。

１匹倒して残り２匹。
できる限り攻撃はよけつつも毒のせいで、すでにＨＰが残り５割。
あー、ちゃんと用意してから来るんだったー、と後悔しながらも必死で攻撃を繰り返す。
「ダブルアタック！」

あと１匹！
技の再使用時間がものすごく長く感じる。
できるかぎり深く強く突き刺していくことで攻撃力は雀の涙くらい増してるっぽいけど、ギリギリだな。
最後の一振りをした瞬間にＨＰバーが真っ白になったのを感じた。

瞬間体が光に包まれる。
まぶし！

死んだのかと思ったら・・・あれ・・・生きてる。

「ぎりぎりせーふ」

ニコッと笑うアーチェさんがそこにいました。
あ、そうだ。変態以外にちゃんと援護する方がいらしたんでした。

「ヒールと毒消ししといたからね」

うぅ、笑顔がまぶしいです。ありがたやー、ありがたやー。

「さすがアーチェ、殺す寸前でヒールか。相変わらずサドだな」

「ひどいな。できるだけ手出しをしないほうが本人のためになるかと思ったんだよ」

こちらを向いて

「毒消し薬の大事さがわかったでしょ」

「は、はい」

相変わらずサドって・・・アーチェさんは優しいお兄さんだと信じたかったけど・・・。

いや、自分の信じたいものを信じよう。

ピコン、バッシブスキル、火事場の馬鹿力を手に入れました、とのアナウンスが。

「火事場の馬鹿力ってなんでしょう・・・」

「おー、残り1%で毒からの復活をとげるってやつか。ぎりぎりで死にやすいから手に入れるのむずかしいんだぞ」

「よかったね」

アーチェさんのよかったねがなんだか黒く感じます。

1%て半分殺す気ないと難しいんじゃないですか・・・。

19

スキル火事場の馬鹿力はＨＰが残り3割になったときに攻撃力が5％アップするというものだった。

便利そうだけど、ＨＰ残り3割で戦うのとか嫌だな・・・。

ダブルアタックをタイミング合わせて使えるようになってきたので狩がさらにスムーズにいくようになり、写真家ラジェからせしめた毒消し草をベルトにさして、一安心。

何度か戦闘を行い通路を抜けると小さい部屋があった。
服なんかが掛けてあったり、誰かが生活しているかのような雰囲気の部屋だ。
真ん中にある机に明らかに怪しい日記帳が置いてある。

「えーと、どれどれ」

さっそく読んでみる。

私がこの洞窟に隠れ住んでからどのくらいの年月が流れたことだろう。
ユクタスに裏切られてこのような果ての地に住むようになるとは思いもしなかった。
カナリーを奪われ、地位も名誉も失い、反逆者としての汚名をきせられた日々は一言では言い表せられない。
しかし、今日私はついに妖精を利用することで世界の理を動かす力を思いついたのだ。
これが成功すれば私は昔の栄光をとりもどすことができるだろう。

その暁には裏切り者のユクタスに復讐を・・・。

いやーな日記だな・・・。
ネクラすぎる。

かさこそ机の中や戸棚の中を調べたけど何も入ってなかった。

「おいおい、なにやってんだ」

明らかに不信そうなまなざしをうけつつも、その辺をガッサガッサひっくりかえす。

「んー。勇者はやっぱり人の家を家捜しでしょー」

「ドラクエかよ・・・」

服のポケットを調べると５０ゴールドが入ってた。やったね。
明らかに後ろからの視線が痛くなってきているけど気にしない、気にしない。

洋服ダンスの中にさらに小さい小箱があった。
お宝の予感。

明けると綺麗な指輪が入っていた。
中に文字が入っている。

カナリー／ハデス

結婚指輪かな。大事にしまわれている。
よし、もらっていこう。

「おいおい、自分の指に装備しちまったぜ・・・」

「るしふぇさん。それはどうかと・・・・」

キラリーン。ダイヤモンドは永遠の輝きだね。

20

なんだか冷たい視線をつけつつも、ずんずん進んで行きますよっと。
キラリーンと光る他人の結婚指輪は防御力も特殊能力も無いみたい。
非常に残念。
あとで売っぱらおう。

「いつか呪われますよ・・・・」

ため息をつきつつもそんな風にアーチェさん言われてちょっとしょんぼり。

いやいや、この指輪だって日の目を見たいに決まってますって。
と自己弁護しつつ、敵を屠っていく。

ん、なんか先がピンクに光ってるなぁ。
洞窟の途中に微妙に光る場所があったので触ってみる。

「なんだろこれ」

そういえば、妖精がどうこういってたなぁとルーナを振り返って聞いてみる。

「これなあに？」

ルーナは近寄って来たかと思うと、ビクっと体を硬直させて、声を

大に騒ぎ出した。

「大変、大変。これは仲間の妖精の光よ」

「ほーほー、きれいねえ」

「そんなのんきなモノじゃないの。これは妖精が生命の危機を感じてだすＳＯＳだから。この光を出した妖精は大変なことになってるに違いないわ」

「あら、大変」

「のんきに言ってないで！お願い助けてあげて！」

「へい。いいよ～」

クエスト追加～と思いつつ、ルーナとやり取りしていると、またしても後ろでコソコソしゃべってる。

「いくらなんでも、あの薄い反応はどうかと思いますね」

「俺もさすがにまかせとけ！って言ってやったぞ」

くるっと振り返って抗議する。

「まかせとけって今言ったでしょ」

「・・・・・」

「へい、いいよ～はまかせとけ！とは違うだろ」

「意味は一緒でしょ～」

ぽんぽんと二人の肩をたたきつつ、慰めてあげてみた。

21

さらに進んでいくと二股に分かれているところがあった。
どうしよう・・。

「ねね、これって宝箱取り忘れないのどっち？」

こういうときはズルをするに限るよね。

「おまえなー。自力でクリアするぜ！って意気込みはないのか？」

「ふふふ。どっちだと思いますか？」

呆れたようにいうラジェに黒いアーチェさん・・。

「また戻るの嫌なんだよ～。ボスじゃないのどっち？」

ニコニコ笑うアーチェさんがキラッと笑って言った。

「人にお願いする態度がなっていませんね」

ぐぅ。

「そうだな。ラジェ様、アーチェ様、お・ね・が・いvって言ってみろ」

ラジェまで調子に乗りやがって、と思うがしょうがない。
めッちゃ可愛く言って悩殺してくれるわ。

短剣を一旦しまうと、メイドリアンローブを整える。
手を前で組んで祈るような体勢をとりつつ、小首をかしげて上目遣いに見つめる。
二人の空気がなんだか怯んだのを感じたけど、そんなの知らない。
できるだけ可愛く言ってみた。
「おねがい、おしえて」
「ぐはぁ」
あ、ラジェが潰れた。
アーチェさんの笑顔が黒くなってキラキラしてきた。
ん。なんだか寒気が・・・。
「こいつはすごい破壊力だぜ。この俺が写真を撮れなかったとは・・・」
「ふふふ。かわいらしいですねぇ」
む、その辺の岩にかじりつくラジェも怖いけど、にじり寄るアーチェさんも怖い。
こんな時は逃げるに限る。
とりあえず左の道を選んで爆走してみた。
「こっちにする〜。さらばじゃ〜〜〜」

逃げ切れるかしら・・・。

22（前書き）

大分あいてしまいました。不定期更新でごめんなさい。

22

すたこら左の道に走っていくと、道の途中に小さい小部屋があった。
ここは入るべきでしょう。

本当に小さい小部屋には綺麗な女の人の絵が飾ってあった。
優しく微笑む姿に思わず見とれてしまう。

日記に書いてあったことを考えると、これはもしかしてカナリーの絵なのかな。
ハデスさん。未練がましい男ね・・・。
持ってみると意外と軽かった。

それを触りつつ、アルケマイズを唱えてみる。
おっとバッグに入ったね。

他にめぼしいものはっと。
なんだか職業が盗賊になってしまった気もするけど、冒険者は家捜ししても許されるはずよね。

いろいろひっくり返して、２０ゴールドだけ発見した。
んーしけてるわ。

さて、次に行くかと外にでたところで追いかけてきていた二人に出会った。

「おまえなー。いきなり走り出すなよ。追いつくの大変だっただろ」
「るしふぇさん。やけに足が速いですよね。私たちのステータスで

なかなか追いつけないなんて種族ボーナスだけとも思えませんが・・・」

アーチェさん、するどいですね。さっきの変な空気が消えててほっとしちゃいますよ。

「ウルフ狩ってたら足が速くなるスキルを手に入れたんですよ」

「なに！そんな話きいたことねー」

「それはすごい情報ですね」

驚く二人にちょっと得意な気分になる。

「足が速いのっていろいろ便利ですよね。広まらないうちにがつっとウルフ狩りに行ったらいいですよ」

「初心者ゾーンにしかいないからなぁ。ここまで出張ってきた甲斐があったってことか」

「そうですね。後で狩りに行きましょう。それはそうと、こっちはボスコースですけど」

アーチェさんの言葉にげんなりする。

「普通は右の道に行って、妖精を助けてハデスを封じるアイテムを貰ってから挑むんですけどね」

「えー・・・もうめんどくさいなぁ。ラジェを生贄にしたらなんと

かならないですか？」

「おい、おまえ」

「そうですね。パーティーを組んで倒せばなんとかいけるかもしれませんね。ギリギリでしょうけど」

「でもお前まで守れないぞ。多分瞬殺だろうから、普通の初心者連れた上級者でも右に一回いくんだぞ」

「二人の言うことは解かるんだけど、ちょっと試してみたいことがあるんだよね。死んでもいいからこっちいこ」

はぁとため息つきながら、アーチェさんと目配せするラジェをひっぱっていくと、

「しゃーねーなー」

諦めてくれたようで髪をくしゃっとされてしまった。

ち、2枚目ぽくてちょっとドキっとしちゃったじゃないか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7388k/

姫プレイ最強

2010年10月11日00時23分発行